

## 『見えない繁栄システム』

エーモン・フィングルトン著・中村仁美訳（早川書房、1997年2月）

長尾待士

カレル・ヴァン・ウォルフレンは、その著書『日本／権力構造の謎』で日本を "Stateless Nation" と呼んだ。日本が、形の上では西欧的法治国家の体制を採りながら、多くの歴史的慣行と集団主義的修正を加えていることに苛立ちを隠さない。法治国家の基礎となる個人主義は、あらゆる人を生まれながら自由平等であるとし、法をその総意の表明として支配者に据える。これに反し日本的集団は法を支配下においていると見る。このため個人に圧力と束縛を加えており、その犠牲の上に経済的繁栄を求める日本は、人間を幸福にしないシステムである(国家ではない)という。

エーモン・フィングルトンも日本をシステムと呼ぶことに異論はないようであるが、その評価に当たって個人主義へのこだわりをもたない。「アメリカ経済の問題点をみればみるほど、問題の根本にあるのは行きすぎた個人主義ではないかと思わざるを得ない。現代の社会では、必要な新しい政策の施行を阻む柵を断ち切るためには、一定の限度を設けて個人主義を制限することが必要なのだ。」という。

まず、西洋近代経済学の根本原理は再検討されねばならない、特に労働力や土地、資本を主要な生産要素としその「有限性」に基礎を置く経済原則が情報化社会に普遍性をもたないことを強調する。固定費と変動費の顕著な逆転による「価格構造革命」とこれがもたらす「世界的自然独占」の事態に最初に気付いたのは日本人という。自然独占化時代に会社の利益追求を構造的に制限し、企業間の競争を効率的に処理するのは、「よいカル

テル」とされる。「カルテルによって製品の価格が横並びに抑えられた国内市場で競争する日本企業は、低いコストで驚くほど高度な付加価値を備えた製品を作るべく努力するからである。」そして、その高い収益が生産技術の革新や新規市場の開拓に継続的に多額の資金を投入し続けていると言う。日本人は、カルテルという河豚から資本の独占・集中化という猛毒を取り除き、その珍味を堪能していると見る。欧米のエコノミストが「よいカルテル」の利点を認めることができないのは、「空気より軽いものしか空を飛べない」と信じ、ライト兄弟の実験を笑っていた気球飛行家みたいなものと糾弾する。

著者は、欧米人の視野に潜む多くの盲点、日本の歴史や文化、サムライ精神や儒教の影響などに言及しながら、日本の経済・社会に向けられた批判に対し一つ一つ再検討を加えている。それは、官僚、金融、雇用をはじめ「アマクダリ」などにも向けられる。個人の利益追求が結果的に国の繁栄をもたらすと信ずるアメリカ的信念と、国益を優先する社会的規制が個人の利益にも基本的要件になるとする日本的通念の差が、際立って対比されている。日本を過大評価しているように見えるのは、米国のエコノミストによる日本批判に対し、彼がディベイト(ゲーム)的な論戦を試みていることにもよるのであろう。端的な例を示そう。ウォルフレンが指摘した住宅事情の悪さ、下水道普及率の低さ、交通網の不備などに対し彼は言う。日本の住宅は狭いというよりコンパクトなのであり、これは蒲団の上げ下ろし等、生活習慣の差として捉えるべきである

し、下水道普及率は89% (浄化層込みの数値と思われる)と先進国並みであると。さすがに、満員電車まで擁護はしないが、国民の福利をはかる物差しは平均寿命であり、日本のそれが世界最高の水準にあること、司法サービスに従事する人口はアメリカの78万人に対しわずか5万人であり、警察官の数においては驚くべき差異のあることなどを挙げ、「よいカルテル」のシステムを再評価せよという。その記述は、豊富な調査・分析の上に立って組み立てられているとともに、比較文化論的な論評も添えられている。例えば、日本人は大きな期待を寄せている息子でも他人の前では「愚息」と呼ぶが、アメリカ人は頭痛の種の息子でも人前では「我家の誇り」と言う。このような文化の差がジャーナリズムなどを通じ経済活動にも大きな影響を及ぼしていると言う。著者は文化の多様性に対するアメリカ人の無関心を批判するが、おそらくこれは日米双方の課題と見るのが妥当であろう。他にも金勘定を越えた文化的経済論が展開されており、面白い読み物になっている。

書名には「それでも日本が2000年までに米国を追い越すのはなぜか」という副題が添えられている。原著は1995年に書かれ、その後若干の国際情勢の変化が見られたが、著者は日本語版の序文で加筆訂正の必要性を敢えて認めていない。この本がアメリカへの警告として書かれ、日本に対するそれでは無いことを考えれば当然かも知れない。しかし、著者が主張する多面的視点の重要性は我々日本人にとっても多いに参考にすべきことであろう。

ちなみに、著者はアイルランド国籍で1948年生まれ、トリニティ大学で経済学、数学、英語学を学んだ後、フィナンシャル・タイムズ、フォーブズ、ユーロマネーなどの記者としてロンドンやニューヨークで活躍。1986年以降は活動拠点を日本に移し、現在は東京在住である。

訳文はこなれていて読みやすい。もともと日本語で書かれたものといってもおかしくないほどである。孟浩然の「春眠暁を覚えず 処々に啼鳴を聞く」を「うっかり寝過ぎた春の朝 小鳥の声で目が覚めた」と訳した人がいるが、そのくらい自前の文章になっている。

なお、同様な問題の取り上げ方をしているものに、C・ハムデン・ターナー、A・トロンペナル著、上原一男、若田部昌澄訳、「七つの資本主義」(日本経済新聞社、1997年3月)がある。彼等は個人主義と集団主義を、演繹法と帰納法の対比にも当てはめる。「そうした(日本的な)思考過程には、個別的事象から普遍化、および総合命題に至るといふ帰納的性格が見られるということである。それはアメリカ人が好む演繹的な思考とは好対照をなしている。」こちらのほうがやや固い本であるが、読み比べてみるのも面白い。

（ながお たいじ  
電力中央研究所経済社会研究所）